

西遊夢錄 (十一)

瀧川規一

蘇國の部

(XII) エナンバラ市

ホーリフッド・ハウス(Holyroodhouse)の宮殿及び僧院(1)(The Palace and Abbey Church of Holyroodhouse)。宮殿と僧院とを併稱することに奇異の感を抱く人は暫く本稿の終末まで忍耐されんことを望む。抑も宮殿の名稱に Holy Rood と云ふことすら特異の感を與へるのである。法王廳とか僧正の官宅ならば或は相應はしいかも知れないが、苟も一國を支配する國王の宮殿として「聖なる十字架」を意味する Holy Rood の名稱が異である。これが説明には最初この建物が創立された時の傳説を聞くより他に方法がない。

十二世紀の蘇國王にデヴィッド一世 (David I (一二四一—一五三))と云ふ王があり善良にして直正、潔白にして恭謙をもつて聞えてゐたが、多くの僧院を建立し寺領を與へたので、セームス一世 (James I) として餘りに多くの王領を奉獻してゐることを嘆かした程である。今日に至るまで蘇國の各地に遺跡或は完全なるものを殘して遊覽客をして昔を想

はしめて居るものの大部分はデヴィッド王の遺業である。そのうち Holyrood の僧院、Kelso の僧院、Melrose の僧院、Jedburgh の僧院、Newbattle の僧院、Cambus kenneth の僧院、Kilmoss の僧院、Dunfermline の僧院及び Holmcultran の僧院は Abbey に屬する僧院である。Nunnery と稱せられる尼院に屬するものには Carlisle にあるもの、Berwick にあるものがあり、Cathedin (伽藍) に屬するもの、Glasgow にあるもの、Dunkeld にあるもの、St. Andrews にあるもの及び Aberdeen にあるものは何れも國王の建立である。その他 Newcastle-on-Tyne にあるメサクト派、カメライト派の二修道院 (Convent) Urquhart にある Priory などその時に出来たものである。本題の Holyrood の僧院が矢張りその時に即ち一二八八年に出来上つたのである。

十二世紀ではアーサス・シートの山麓からエナンバラ城に至るまでの一帯の地域は一大森林地帯であつた。森林には三歳若くは五歳の齡を重ねた雌雄の鹿が澤山棲息し、また狐類も澤山居つた。國王が群臣を引き具して狩獵をされるには風

強な場處である。毎年九月の十四日には聖十字架日の祭日が来た。この日國王はいつもの如く祭典に參列して默禱してゐたが、式が畢ると多くの若き貴族等が國王の面前に現はれ狩獵に行かんことを願つた。その時國王のお抱えの懺悔聽聞僧(Canoe)が斯かる神聖なる日を狩獵によつて潰されんことを恐れて國王に諫止したが遂に聽き入れられなかつた。當時國王はエザンバラ城に居られたが、勇み立つ若き貴族等と共に城の東方の森へ馬を進められた。獵犬の吠え聲や角笛の響く音は森に響き亘つて、その騒しさその賑やかさは實に物々しい有様であつて、爲めに森の腰奥にひそむ獸類は群をなして走り出ると思はれる程であつた。一隊の若武者共は今やアース・シートの山腹にある Salisbury Crag と呼ばれる岩壁に到着したが、彼等は追ふ獲物によつて國王を只獨り置き去りにした。爲めに國王に伴へる侍臣は一人も居らなかつたその時誰か一人でも侍臣が其處に居つたならば國王御自身の仰せられた言を實證することが出来たが、今申す如く誰も國王の側に居らなかつたので國王の仰せられることを其儘に受けとらねばならぬのである。

國王の云はるる處に依ると、國王はどの時これまで見たこともないやうな立派な又角をもつ兎事な鹿を御覽になつた。鹿は國王を目がけて突進して来る。この鹿は非常に力が強く馬上の國王を馬諸共に地上に打ち倒した。國王は倒れたまゝ、鹿の角を兩手で確と握られた。鹿の角と思ひきや鹿の角ではなくて手に握られたものは十字架であつた。さうして鹿は非

常な勢で逃げ失せた。逃げ失せたと思へばその姿は泉の中に消え去つたのである。この泉こそ余が最初アース・シートに登らんとした時拘した清泉であり、蘇國民謡に「アースシートに臥し泉の水を飲まん」と云つた有名な泉である。その晩國王は夢に自ら救命の場處に僧院を建立せよと神より命ぜられた。

抱えた僧の助言に基いて、佛國及自耳議から工人を聘して僧院を建て、聖なる十字架に奉獻し、高き祭壇の上に奇蹟的な十字架を置いたと云ふ。

これがホーリールド僧院に纏はる傳説である。後世の學者が研究の結果この傳説は後人の附會であつて十二世紀當時のものでなく、十五世紀の初頃のものと文書の上で立證するのであるが、吾々は Holmrod の由來を想像し得れば足るのである。

最初建立された場處はエザンバラ城の岩の上に建てられたらしいが、その後間もなく新らしき地を撰ばれた。今日の宮殿の一方に廢墟の高塀を遺して衰な殘骸を風雨に曝らしてゐるのがそれである。何れも當時は時めく貴人であつた人々の墓穴の扁石を靴蹴同様に踏み歩く時、只無縁塔を見てものの哀を感じるより以上に懷古の情を懷られるのである。廢寺の跡に一の哀を感じるのは木造建物よりも石造建物であると異國の土地に足を踏み入れた當初から感じてゐたのであるが今このアペチャーチの跡に國王皇后等の墓の荒れ果てた様を見て思はず哀愁を覺えたのである。

傳説に信を憑くことが出来ぬにしても聖十字架をこゝに記念すべき史的事實がある。Edward the King の娘 Margaret は Edward the Confessor (一〇六六年歿) を祖父の兄弟にもち、蘇國王 Malcolm 三世に嫁し、Eadgar と Alexander 一世と David 一世の三人兄弟と、後に Henry 一世に嫁し英國の皇后となつて The good Queen Maid として謳はれて有名な娘とな産んだ人である。この Margaret は信仰心の強い人であつて、羅馬教の習慣に従つて主日 (The Lord's Day) 四旬祭 (The Lenten Fast) の斷食とを蘇國に輸入し、死後聖徒として St. Margaret of Scotland と呼ばれてゐる。彼女は十字架の形をした黄金の手箱を蘇國へ持ち來た。その蓋には黒檀に基督の像を刻し、内には基督が處刑された時使用されたと稱する十字架の斷片を納めてゐた。マ

ーガレット皇后は夫王が Northumberland の Alnwick の戦争で崩去されたことを聞いて悲歎の餘りエザンバラ城内で一〇九三年に崩ぜられた。この手箱と十字架とが David 王の手に移り、王はこのアベの僧侶に與へた。この十字架は後に The Black Rod of Scotland 即ち「蘇國の黒十字架」として蘇國民の標章となりその他の標章中に於ても最神聖なものと視做されるやうになつた。大切な聖物を安全に保護する爲めにエザンバラ城内の禮拜堂に安置されてゐたが、Edward 一世の時に他の國王の標章などと共に一旦英國王に渡つた。十四世紀に Northampton の協約によつて蘇國の獨立が認められた際(一三二八)再び蘇國に戻された。が十八年

後 Reformation の時に再度蘇國の地を離れその行衛が不明になつて以來今日まで全くその所在を明にしない。

Edward 三世が佛蘭西と戦争し出征してゐる隙に乘じて若き David 二世は大军を率ゐて英蘭に侵入した際黒十字架を戦陣に携へ必勝を期したが、さすがの黒十字架も奇蹟を現はさず戦敗の慘を見、David 二世は十一ヶ年間捕虜の身となり多くの部下の將士を殺した。暫の間他の戦利品と共に英軍の手にあつて、黒十字架は Durham Cathedral に安置されてゐたが、上述の Reformation の時に紛失したまゝである。アベが建立されて後エザンバラ城に至るまでの間に町を作ることを許可された、特別に許可された町を蘇國では burgh と云ふ。本通りを Canongate と云つた。今日でも宮殿の前庭から走つてゐる本通りの名を斯く呼んでゐるのであるが、蘇國で gate は英語の門 (gate) の意味に非らずして、way 又は road の意味である。今日でも蘇國で sauntering their ain gate といふ going their own way の意であり、町の入口にある town-gate のことを蘇國では yett 又は dirt と云つてゐる。

この僧院は改革の時まで諸種の罪人殊に負債の爲めに罪人となつた者の避難所となつて居た。今日では姿を消して見ることが出来ないが、僧院の庭に十字架が立つて居つて、負債を仕拂ひ得ぬものがこの十字架に手を觸るるや法律の網を免れ得たと云ふ。

歲月の経るに随つてアベに消長があるが、遂には蘇國王が

首府たるエダンバラ市に滞在中は百官屬僚等と共に病院に滞留される度數が増加した。或は崩去と共に其遺骸を葬ることをはじめ諸種の會合や儀式的會場にあてられることが頻繁となり、從つて屋舎の狹隘を告げるに至つたことも事實であつた。

遂に King James IV (一四九八—一五〇三) の時になつて國王は宮殿を敷地内に建設することを決心され、一五〇三年には英蘭の王妃 Margaret を迎へる爲めに略建築が完備した。若き王妃は出迎への蘇國王と共に北上して新宮殿に入御になつた時の光景は Somerset Herald の筆によつて新婦の饗宴の狀況が活寫されてゐる。蘇國の歴史を研究するものが Wey-toun の Cronykil と Belenden の Boece と共に悦んで讀むものである。

一五〇三年の七月の末つ頃のことであるが、Princes Margaret は美しき馬に乘られ、多くの伴人を連れて倫敦を出發し、靜々と蘇國の都を指して旅の途に上られる。通過される國々では王妃に祝意を述べる爲めに地方の貴族や紳士は騎馬に跨つて出かける。田舎娘は王妃を拜するうれしさに跳躍する。Berwick では英國の大砲の轟が天地に響き祝意の皇禮砲に人の胸を驚かす。耳に祝砲を聞いて人の心はいやが上に悦び躍つた。Border と今日も云はれてゐる國境を横ぎつて、Lam'erton Kirk に來ると、蘇國の紳士が隊を組んで王妃を出迎へた。

其數騎馬の者五百、徒歩のもの一千、その壯觀は見る人を

驚かした。それより三日目であるが Dalkeith で國王は王妃を迎へられる。王妃は Dalkeith と Newbottle Abbey とで四日間滞留される。その間國王は毎日エダンバラから騎馬で來られ、結婚前の求歡の形式をとられる。黄金色の布切れで縁とれる緋のジャケットを着た國王は自ら或は馬術の妙技を見せて王妃を慰め、或は小琴クラクコードを彈し、ルエート奏して歡待につとめられた。この樂器は非常に王妃を悦ばし王妃はその音に耳を傾けることを樂まれた。斯くて八月の七日の朝に王妃は黒ピロードにて縁取りをなし、眞珠と寶石とにて飾れる襟をつけたる金襴の外衣を被り、愈蘇國の都エダンバラに向はれた。國王は鹿毛の馬に跨り、黄金色のジャケット紫緞子のダブレットに深紅の靴下と云ふ目も映ゆるばかりの輕裝にて、途中まで出迎され、王妃の姿を見るや馬から飛降り恭しき姿勢をとつて接吻される。最初自分の馬に王妃を移し載せんとせられたが、生憎馬は二人を乗せるやうに馴らされ居らず、止むを得ず王妃の馬に乘られ、國王は前に王妃は後に二人同一の馬にて徐ろにエダンバラ指して進まれる。神話の Paris と三人の女神とに扮したるハイセントがお出迎へに出て來る。宮殿前の十字架の噴水からは清泉にはあで血の色せる葡萄酒が噴き出で、人々の飲むに委せてある。町家の窓には華やかな裝飾を施してある。行列は町からホーリールドの教會に行つて進む。騎馬の者共は悉く馬から降り、國王自ら王妃を抱いて馬より降り、大きな祭壇前に兼ねて設けの黄金色の座布團の上に跪き、形式を追つて禮拜を

すまして後に宮殿に入られる。

結婚式當日の壯嚴なる光景、諸侯百官の華麗なる服裝はこれを叙するにさすがの筆者すら適當なる言葉を見出し兼ねて居る。相次いで饗宴、誦唱者の古詩誦唱、舞踏、騎士の競技は斯うした祝典には古來よりなくてはならぬ催である。今まで殆二百年間絶え間もなく起つて、蘇國人をして飽かしめてゐた英蘇兩國の葛藤戦亂はこの兩王家の結合によつて終止するであらうと考へられたので、王家のみならず國民一般が衷心から悦んだのである。

次に一五〇七年には羅馬法王から贈られた國劍劍帶及び聖帽の受授式がこの僧院で行はれた。蘇國の寶として即 Regalia の一部として今日エザンバラ城内に陳列されてあるが、この國寶こそは數奇な運命を経て今日に至つてある。十七世にクロムウェル軍の侵入を受けた時蘇國會議の決議によつて Dunnotar 城主が預かることになった。城主はチャールス二世に従つて英蘭に轉戦してゐる。留守を承つた George Ogilvie of Bannock はクロムウェル軍の爲めに包圍され、國寶を安全地に移さんことを企てた。Kinneil の牧師の妻が病床に横める留守城代の妻を見舞ひたいから入城を許せと攻圍軍に申し込んだ。當時の風習として蘇國婦人は必ず羊毛つむぎの手道具を携帯するのが常であつたので、この婦人はその道具に似せて遂に國劍と權票とな城外に運び去ることが出来たが、牧師の妻が乗馬せんとする際に攻圍軍の將 General Morgan は牧師の妻を抱いて助け上げんとした。その時は危

機一髪之處で前掛けの下の國劍は發見されんとし、王冠はころげ落ちんとする處をたすかつたのである。これ等の國寶の一部は教會の敷石の下に埋藏され一六六〇年の王政復古によつて國王の手にかへり、殘餘はその後壁内から發見されグイクトリア女王の手に入り、今日見物人の見るが如く寶庫内に納つてゐるのである。

新著紹介

○奄美大島貝類目錄

鹿兒島縣教育調查會發行 昭和三年六月 黒田徳米編 四六倍版一二六頁

昨年八月 聖上陛下奄美大島への行幸の際、天覽に供した大島産貝類に加へて、諸種の材料を整理し、一千百四十七種の目錄を獲たものである。奄美大島は貝類の一寶庫とも云ふべき處で、溫帶性のものに加ふるに熱帶性のものを以てし、分布から云へば沖縄臺灣小笠原とに對し濃厚な關係を有する貝類群である。約一千百種の貝類は主として淺海のものであるが後來深海の探検が行届いたなら大島附近の貝類の種類は甚しく増すことであらうが、此の目錄は獨り現生の貝類の分布上興味ある資料を供するに留らず、鮮新世後の化石貝類の研究上役立つことが多いものである。殊に臺灣産の第三紀及洪積世貝類の研究上其の關係する所少々ならぬものと考へられる。猶本目錄には脚註に於て命名に關する注意及論議の短